現代韓国メディアの植民地、戦争経験の形象化とその影響－映画、ドラマを中心に

李 基勳（延世大学）

原文は韓国語、翻訳：尹在彦

本研究は韓国の独立以降から2000年代まで、韓国の映画やドラマがどのように植民地と戦争経験を形象化し、それが大衆の歴史認識にどのような影響を与えたかを考察することを目的とする。1945年の独立以降、1950年代、1960～70年代、1980～90年代、2000年代以降に時期を分ける。

注目すべきことはどのような素材から過去にアプローチするか、また同様の素材に対しアプローチがどのように異なるか、その歴史的変化を通じメディアを支配している歴史認識とその影響を追う。

初期は強力な民族主義が植民地時代の歴史の再現を支配していた。当然、抗日運動、独立運動を扱った映画やドラマが主となっているが、その中でも重大な変化が表れる。代表的なのが「柳寛順」（訳注：女性の独立運動家）を取り上げた映画である。1948年、1959年、1966年、2019年と5回にわたり映画化されてきた。主人公を民族運動の象徴とする描き方は変わっていないが、女性の主体性、男性の役割、支配者としての帝国の表象の全てが制作年代ごとに変化しつつある。しかし、純然たる民族主義のイメージは存在していなかった。

時代ごとの国家イデオロギーと資本主義的な市場論理が重なることで、また異なる植民地像を創出した。1960～70年代の「満州ウェスタン」が代表的である。「日本軍慰安婦」に対する形象化、「モダン京城」のイメージの登場と変化等も検討すべき題材である。朝鮮戦争の場合、国家はより積極的に介入しイメージを創出していた。戦争直後の1950年代からの検閲と弾圧は深刻で、映画「誤発弾」のように戦争の経験を迂回して描写することが最善策だったこともある。

変化は1980年代以降、民主化運動の活性化の中で、反共映画、戦争映画が「（南北）分断映画」に転換することにより表れた。多くの映画やドラマが戦争を客観化しようとしたり、厳粛主義から抜け出したりして、戦争を形象化し直そうと試みた。依然として「国史」の力は相変わらず過去の形象化を制約しているが、共に新しい物語を探す努力が求められている。

■李 基勳（LEE, Kihoon）
1991年ソウル大国史学科卒業、1993年同大学大学院国史学科修士、2005年同大学大学院

博士。木浦大学史学科教授を経て、現在延世大学史学科教授。季刊『歴史批評』編集主幹、歴史問題研究所副所長。専攻分野は近代社会史及び文化史。
主な著作：「언니의 곡절 – 한국 근대 가족과 여자 어린이 노동」『역사비평』141、2022年。『무한경쟁의 수레바퀴: 1960-1970년대 학교와 학생』서해문집、2018年。『청년아 청년아 우리 청년아: 근대 청년을 호명하다』청년사、 2014年。